

## 日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働者状態

The Labour Year Book of Japan special ed.

## 第五編 物価・配給統制と労働者の生活

## 第二章 配給、消費、生活実態

## 第三節 栄養摂取量の推移

## 栄養必要基準

まず厚生省の厚生科学研究所が一九四一年九月に発表した「日本人栄養要求量標準」によれば、「日本人平均一人一日栄養要求量標準」は熱量二千カロリー、蛋白質七〇グラム、脂質二〇グラム、糖質三七〇グラムとなっていた。この年齢別・労作別要求量のうち三〜五〇歳の男子についてみると(一日当たり)、軽労作は熱量二一〇〇カロリー、蛋白質七五グラム、中等労作はそれぞれ二四〇〇カロリー、八〇グラム、比較的重労作は二七〇〇カロリー、八五グラム、重労作三千カロリー、九〇グラム、最重労作は三三〇〇カロリー、一〇〇グラムとなっている。中等労作の熱量二四〇〇カロリー、蛋白質八〇グラムが全体の標準であった。そしてこの標準要求量は「ギリギリ決着のもので」、この標準量から「仮りに四分の一・二五%切下げると、生きてはゐるが、これは働かない場合で出産も出来るかどうか分らず、病気も起るかも知れない、と云ふ状態」になるという最低必要量であった(「標準生計費の研究」戦時生活相談所、一九四二年七月刊、一〇ページ)。

次に労働科学研究所(労研)が発表した最低栄養必要量(同研究所が一九四二年三月に発表した「最低生活費の研究」において基準としたもの)によると、作業の強度を三つに分け、男子のばあい軽度的作業については熱量二二〇〇カロリー、蛋白質七五グラム、持続的作業はそれぞれ三千カロリー、九〇グラム、重筋的作業は四千カロリー、一〇〇グラムとなっている。中心基準は持続的作業の熱量三千カロリー、蛋白質九〇グラムであった。

## 栄養摂取量の推移

まず国民一人当たり平均の栄養摂取量の動きをみれば第78表のようである。一九四一年の摂取量は、熱量二一〇五カロリー、蛋白質六四・七グラムとなっており、これを先にみた厚生科学研究所の「日本人平均栄養要求標準」の熱量二千カロリー、蛋白質七〇グラムという最低限界と比べても、すでに蛋白質摂取量の低下が目だっていた。一九四二年以降摂取量の低下は年々著しく、熱量は二千カロリー以下となり、一九四五年には一七九三カロリーにまで低下した。蛋白質の摂取量は一九四二年に六〇・二グラムに著減し、その後やや増加したが、六〇〜六五グラムの低水準のまま推移した。

次にこれを大阪市民のばあいについてみると第79表のようである。配給によって摂取できた栄養量は熱量、蛋白質ともにきわめて低く、配給では通常の生活はまったく不可能であることを示している。これをヤミ購入などによって補った実際の摂取量についてみても、太平洋戦争下の一九四二年以降、熱量はついに二千カロリーに達せず、一九四四年三月には一八四二カロリー、そして一九四五年七月には一八二四カロリーと著しく低下している。蛋白質の摂取量も一九四三〜四五年三月ごろにかけて低下が目だっている。

また東京における一九四四年一月現在の配給栄養量は第80表のようである。熱量は一四〇五カロリー、蛋白質は四〇グラムときわめて低いが、しかもこの配給量による栄養量の算出については机上計画どおり順調に配給されることを前提としたものであって、実際上はさらに低下していることが明らかであると指摘されていた(日銀調査局資料「食糧品ノ配給ニ付テ」一九四四年一月による)。なお都市居住者の一九四五年七月における栄養摂取量の状況は第81表のようになっている。配給による摂取量は前橋、山口、盛岡などの地方都市の方がかえって少ないが、先にみた大阪市のばあいと同様に各都市とも全般にきわめて低く、実際の摂取量も熱量をはじめ各都市とも著しく低い状態にあった。(注1)

(注1)しかし戦争中の栄養摂取量のこうした低下については、先にしるしたような最低必要基準量そのものが高すぎるのだと批判し、栄養低下の状況を合理化しようとする迎合的な科学者も多かった。たとえば杉靖三郎氏は「日本人は配給量の玄米三三〇グラムに味噌二三グラム、野菜少々(蛋白質三〇グラム、脂肪一〇グラム、含水炭素三〇〇グラム、計一四〇〇カロリー)で大丈夫」だと述べていた(「日本の百年」3、二三一ページの引用による)。

日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働者状態

発行 1964年

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 東洋経済新報社

2000年2月22日公開開始

---

■ ←前のページ 日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働者状態【目次】 次のページ → ■  
日本労働年鑑【総合案内】

---

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)

---